

さつみ・古屋垣外遺跡

中央道埋蔵文化財発掘調査報告書

1970.3

日本道路公団 名古屋支社

I 環 境

1. さつみ遺跡

さつみは飯田市上飯田羽場8区902-908番地を中心とした地帯である。円悟沢井が幅20m、深さ5mの谷をなして東流している右岸の台地上に立地しており、海拔540mである。

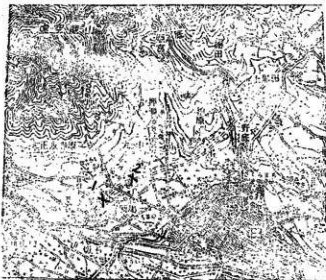
ここは旧円悟沢井の作った微かな扇状地上に立地している。したがって古い時代にはしばしば旧円悟沢井の氾濫した所であると考えられる。今日1-2'の東面した緩傾斜地となっている。

円悟沢井は平安時代末期の開きと推定されるが山この井の設けられる前にも小さいが河があったのを利用したものである。飯田松川の作った古い段丘面(それは平坦な正永寺原で、その先端に元山白山社がある)と風越山中の峰正永寺山の麓に発達した新しい扇状地の間を流れ下った小さい川があった。その遺跡へ人工の円悟沢井を築いたものである。それでもとの小川を築き旧円悟沢井と名づけた次第である。

本遺跡の西北300mの扇微遺跡は、古くよりよく知られた縄文早・前・中・後晩期より弥生時代・須恵時代にかけてのさつみ・古屋垣外遺跡園(図1)1さつみ2古屋垣外遺跡であり、特に縄文後期土器の出土が多い。⁽²⁾ また本遺跡の東北300mの方角東よりは弥生式時代の住居跡が発見され佐藤勉信・木下平八郎らによって調査された。また前述の元山白山社は北に1535mの風越山の頂上を仰ぐ位置にあり、古社と考えられ、その社前あたりは早く開けた古水田地帯であると考えられる。⁽³⁾ また鎌倉時代の東山道はこのあたりを通過したとも推測せられる。

1. 筒井 泰藏 飯田台地の水利、伊那 1968-5月
2. 長野教育委員会 新産都市等開発地埋蔵文化財緊急分布調査報告書 昭和41年度

3. 1に同じ



飯田市さつみ遺跡

長野県飯田市上飯田 902-908番地

飯田市古屋垣外遺跡

長野県飯田市上飯田 6585番地

調査期間 昭和45年3月1日~3月31日

発掘調査委託者 日本道路公団名古屋支社

発掘調査委託者 長野県中央道遺跡調査会

発掘担当者 大沢 和夫

さつみ・古屋垣外遺跡調査団名簿

団長 大沢 和夫 日本考古学協会員

専任調査員 佐藤 勉信 #

遠藤 藤彦 長野県考古学会員

木下平八郎

土屋 長久

調査員 今村 善興 日本考古学協会員

宮沢 恒之

伴 信夫 長野県考古学会員

2. 古屋垣外遺跡

3月17日午前中さつみ遺跡より器材運搬、発掘準備をなし、グリットの設定をする。2m×2mのグリットを縦にa～f列、横に1～20列を設け、a列に平行して2m×20mのトレンチを西側に設定する。

公園との契約によると44㎡になっていたが実際面積は520㎡あり、このため遺構の存在をたしかめて調査をすすめることにした。午後より調査にとりかかるが、地層はさつみ遺跡と同様に氾濫地層の砂層がいろいろ混り、調査に苦勞する。a1, 3とa5に住居址壁面と床面を検出し、拡張して掘りあげる。弥生後期住居址1・2号とする。2号住居址の上部にa、bの境に列石があり近世の新しい陶器片を伴出するが遺構とみより、細の石を築めて埋めたものとみられるものと考えられた。これと同じ線上にb9・b10に列石があり陶器片を伴出する同じ性格のものとみられた。

d3～d7に列石があり、前記と同じものとみて調査したが、これは径60mm位の円形に拳太の石を積み上げた独立したものとなり、さらに調査をすすめ、火葬墓群であることを確認した。C3には2つの土塔を、C5には石を並べる形態の火葬墓1を検出した。11列以東には僅かな遺物を見たが遺構は検出されなかった。15・16列に深い黒土のおちこみがあり、調査をすすめたが新しい果樹園の消毒パイプの埋めこみの溝であった。トレンチ8に土塔を検出し、9、10に住居址の壁面と床面を検出し、拡張して調査し、弥生前期住居址の全貌をみることができた。トレンチ1～7には砂の地積で、遺構も遺物も発見できなかった。

3月19日には、遺跡公園名古屋支社の鈴木調査役、県教委林指導主事が遺跡発掘状況を視察した。

3月21日遺構の清掃、写真、実測をなし、現場における調査を完了した。調査面積は、72㎡、18グリットで住居址3、中世火葬墓14基と土塔1を検出し、全面発掘の成果を上げた。

調査期間中を通じ3月にしては異様な天候で連日厳寒中の寒さと吹雪、強風になやませられながら調査を続行したもので16日の雨に1日現場作業を休んだのみの苦難の調査であった。

現場調査終了後、休日なしに遺物整理、製図、報告書の作成にとりかかる。



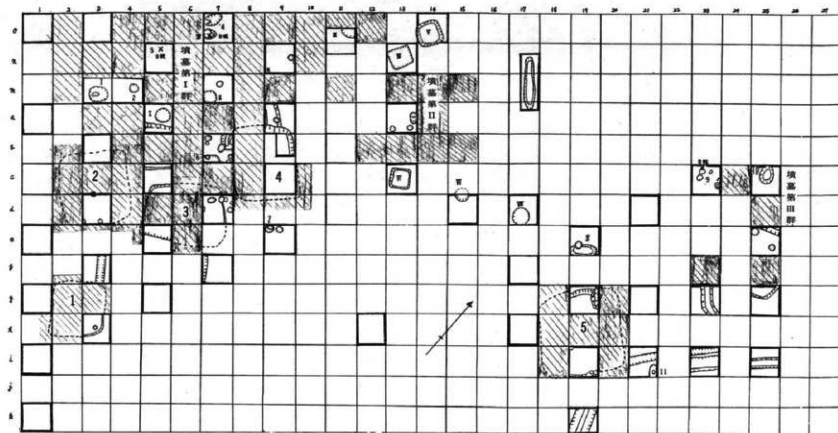
古屋垣外の発掘風景



古屋垣外の遺構

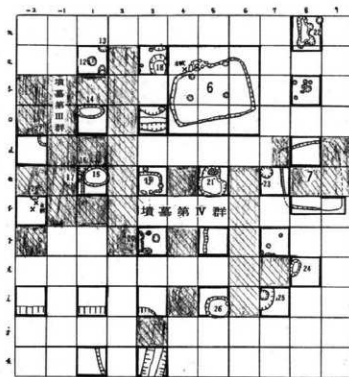


日本道路公園鈴木調査役の視察



第 I 調査区

0 10m

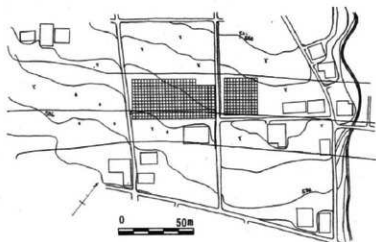


第 II 調査区

さつみ遺跡遺構図

(図 2)

さつみ遺跡グリッド設定図



0 50m



さつみ遺跡遺構図

III さつみ遺跡の遺構及び遺物

I 住居址

(1) 1号住居址 h 3グリットの深さ112 mmに埴面とが8mmおちこむ床面と 柱穴1個を検出したもので、遺物は打石器と弥生式土器片を床面で発見している。f1・h2・g1・2につながるものとみられ調査を要す。規模からみて中島式の住居址と考えられる。この住居址につながるものとみられるV字溝(巾60mm、深さ20mm)がf3にあり、この関連を調査するためg4・h4・5の調査が必要である。

(2) 2号住居址 b3・d3に発見されたもので、この遺跡の最初の調査のため見分けがつかず人夫が床面を切りこんだ後に発見したものであり、深さ65mmに床面がありd・e3グリットの境に壁をもつものとみられる。b・c・dの3列b・c・dの4列、e列の2,3,4につながるものとみられ調査を要す。遺物は須恵器片と縄文後期片をみており、形態からみて平安期の住居址と考えられる。

(3) 3号住居址 C5に東に向くおちこみとe5の北西に向くおちこみがあり、(これは人夫により2号住居址と同じに切りこまれた後発見した。)d7に南西に向くおちこみがあり、埴面、床面、柱穴が検出され住居址を確認したもので、遺物は良質な青磁陶片、灰釉陶器片、鉄滓の出土をみており、平安期の特別な住居址とも予想されるd3・c6・c7・e4・e6・e7の調査が必要である。

(4) 4号住居址 a9・b9に壁面と床面を検出し、C9に深さ90mmの床面を検出している。遺物は弥生式とみられる土器片、鉄片と鉄滓の出土をみている。形態からみて弥生後期のものとみられるが遺物が少なく確認できない。住居址は完全に残り、b7の北東隅に壁面がわずかにみられている。

a7、a8、b8、b10、c7、c8、c10、d9、d10を調査し住居址を完全に調査する必要がある。a9グリットの4号住居址の北西には壁上に浅いおちこみをもち柱穴もみられ、縄文後期土器片、磨石の出土をみ、縄文後期の住居址を切って4号住居址が構築されたとも考えられ、n9には縄文後期土器の4分の1個体が検出されており、a6、a7、a8、m8、m9、n7、n8の調査も必要である。

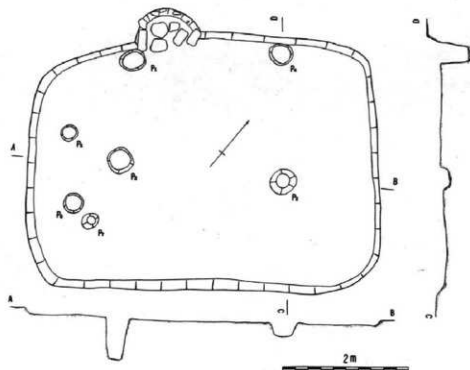
以上4住居址は地層上の見分も困難なものであるが、その性格も複雑であり、これを究明することの意義は重要である。

(5) V号住居址 g19・i19に発見されたもので、g19にはカマド(写6)とみられる石組をもち、i19の北東隅にも石組をもち遺物は須恵器片、灰釉陶器片が検出されており平安期の住居址とみられる。g18・g19・g20・i18・i20の調査の必要がある。

(6) VI号住居址(図3) II調査区のa・b・cの4、5、6列に位置し、全面を発掘したものである。東西3.5m、南北5.5mの長方形隅丸の住居址で北壁にカマドをもつ支柱穴4個と支柱穴3をもち支柱穴は北壁きわにP1・P4の2個の2例p2・p3は住居址のほぼ中央より西



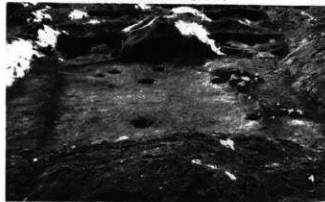
さつみ5号住居址かまど(写6)



さつみ6号住居址 (図3)

東壁より1m~1.5mの距離にある窓間的なものである。

遺物は区分期とみられる土師器で平安末の住居址とみられる。須恵器灰輪陶器の出土はなく、遺物は極めて少なく、おそらく移動した後の住居址と考えられる。本趾を切る土坯がみられるが、今後の調査にまらない。特にカマドの南側より磁瓦光玉が検出され、火葬墓の存在が予想される。



さつみ6号住居址

(7) VII号住居址 II調査区d8・e7

f8に発見された住居址で、f9の上層部の土をはおアランを確かめたもので、およそ東西4.5m、南北4mの大きさとみられる。遺物は山茶わん片を壁上で検出したのみであるが、平安末の住居址と考えられるd7・d9・e8・e9・f7・f9の調査を必要とするものである。

2. 土坯及び火葬墓

土坯には楕円形の径120cm~180cm×70cm~140cmで15cm~30cmの浅い掘りこみをもつ縄文後期か弥生後期とみられるものと、径90cm~110cmの円形または一辺が130cm~140cmの方形の深い穴を掘りこんだ近世土葬墓とも考えられるものがある。この二つの性格は構築方法において全く異なる様相を示すものである。がいずれも時代を決定づける遺物がみられない。後者においては近世土葬墓の場

合、今までの例によると人骨の形をなしており、寛永通宝の六文銭やキセルを伴出しているが何も遺物をみないことはその性格を究明すべく問題点であり、再発掘する必要がある。

火葬墓とみられるものは径40cm~60cm大の土坯をもち、①土坯のみのもの ②土坯のまわりに石をつめる ③中に石を置く、またはたてる ④石を並べるの4形態がみられる。土坯内に中世陶片をおくものや古銭が入れられたものがあり炭が中に入れられているが火葬骨片、骨灰は検出されていない。しかし形態からみて明らかに中世火葬墓である。

これらの土坯、火葬墓が点在するものでなく、一つの群をなして存在するものとみられる。b、a、m、n、o列の2~10列にある1群=墳墓第1群、o~eの11~19列に存在する土葬墓を主体とする1群=墳墓第II群、a~fの22列より第II調査区4列に連がるとみられる中世火葬墓を主体とした1群=墳墓第III群、第II調査区の全域にみられる土坯を主とした墳墓第IV群を上げることができる。

(1) 墳墓第1群

2, 3, 4号は火葬墓とみられるもので土坯のみのものであるが2号よりは美しい緑色をなした青磁系の陶器片が底部にはいており、3号よりは古銭一箇鏝して字の不明なものが入っている。n5の5号は土坯がはっきりしなかったが大観通宝1個が検出されO5につながると思われる。

O3よりは大形のオシロコ一古瀬戸地

片が出土し、この北西側に火葬墓の存在が予想される。1号は上部に地土の塊をもつ特殊な土坯で遺物は縄文後期土器片が検出されている。6号土坯は1部分の発掘で今後の調査を要する。I・II号墳は径90cmの整った円形で垂直に砂層を67cmと38cmの深さに掘りこんだものであり、墳墓第II群にはいと考えるとされる。第I群は中世火葬墓を主体とするもので、この区域での遺物は良質な中世陶片と宋銭であり、中世前半の火葬墓とみられるもので、この全域を調査し火葬墓群の性格を明らかにすることは近伊地方の中世解明のためにも重要なことである。



さつみ2号火葬墓 (写真8)

(2) 墳墓第II群

III号~VIII号の土葬墓とみられる方形の大きな土坯をもつIV・V・VI号は方形III・VIIは円形で50cm~70cmの深さをもつIV号の方形土坯は砂層より80cmの深さをもち垂直に掘りこまれたもので



第II群IV号 (写真9)

方形の楕筒を埋めたとは考えられないもので底部も浅い舟底状を呈す。円形の土坑幅直は直径110cm 砂層は75cm厚に隔りこむもので楕筒を埋めたと考えられるものであるが、ともに遺物がなく、土葬穴との推定範囲を出ない。

Ⅲ・Ⅳ号は一部分を調査したのみであり、またm、n17列にみられた上部に列石をもち下部は長さ3.5m、巾70cmの細長い土坑状をなすものについては、磁石、中世陶片、縄文後期土器の出土をみており、おそらく細の境に捨てられた石の堆積と思われるが性格はわからない。以上のような観点から未調査グリットの発掘が望まれる。

(3) 墳墓第Ⅲ群

第Ⅰ調査区の北東側から第Ⅱ調査区の南西側につながる火葬墓を主体にしたもので、7基の火葬墓と10、11号土坑が第Ⅰ調査区に見えられている。9号より泉末元宝、28号より威平元宝と天璽元宝が、また6号住居址のカマド北西側（おちこみがみられる）よりに銀鍍元宝が検出されており、16号よりは良質の中世陶器片が底部に入れられていた。12号（写10）には土坑の中心に扁平の石を石碑状に立ててあり、火葬墓形態の特殊なものとみられた。

のとみられた。この火葬墓群は第Ⅰ群と時代的には同じとみられるが形態上に立石をもつ、石を並べる、周囲を石でつめる、土底のみのもの4分類をもつ多様性のものでも火葬墓周辺の未調査グリットの発掘は重要な火葬墓究明の課題をもつものである。

(4) 墳墓第Ⅳ群

第Ⅱ調査区の調査グリットの大部分に見えられており、10基の土坑が検出されている。そのうちには完全に調査されたものは5基で他は1部分を現わしたにすぎない。21号は砂層下の深さ145cmに炭を多く含む黒土層があり、砂層を30cm掘りこんだ土坑であり、遺物は何もなく時代は決しかねるが、特殊な形態をもつものである。14号よりは古銭（字海鏡）を伴出している。

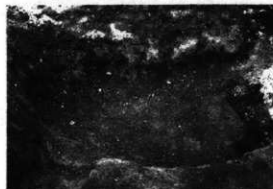
土坑形態には整った楕円形のもの、方形に近いものもあり、出土遺物は古銭、中世陶片を出すもの、縄文後期土器片をもつものがあり、土坑形態と時間的な差を究明する課題が残されており、調査未了の土坑を調査する必要がある。

3. 溝

第Ⅰ調査区f3に東西に向く60cm巾の溝があり、i25、i23（i21にはみられない）第Ⅱ調査区i-2、i1に連がりi3で終わる巾60cmの溝と、これに降りあうようにk3に巾150cm、深さ150cmのV溝がある。また第Ⅰ調査区g23に東西に向きカーブするV字溝、i21、i23では大V溝に平行する小溝が検出されている。これらの溝は部分的にみられるもので、水路としては考えられな



第 3 群 12号 (写真10)



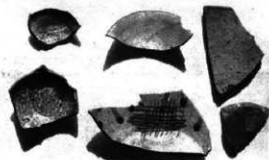
第Ⅳ群 14号 (写真11)

いもので周溝の性格をもつものと思われる。溝についても住居址との関連において究明したい。

4. 遺物

遺跡全面にわたり表面より縄文後期土器片、黒瓦石片が採集されており、後期の遺跡と考えられていたが、これからの土器片の多くは磨滅しており、上段にある溝状遺跡よりの流れこみとみられる。

表面下中に出土した遺物は多くは中世陶片で磁器類が多い。（写真12）中には良質な灰輪による淡緑色の茶、茶わんの類もみられる。これらの中まじって青磁陶片、灰輪陶片があり、時代的に平安末にさかのぼる遺物の存在を示すものである。



さつみ遺跡遺物1 (写真12)

縄文後期の遺物として注目されるものに、C9出土の4分の1個体分（写13）がある。口唇部は平で、口縁の下に四方に頂点をもつゆるい山形状に突帯をもち、これに深い凹痕をめぐらすみで他は無文の陶器である。

この期の石器として分銅形石斧片（写14の8）がi25より出土している。

弥生式土器ではI号住居址、IV号住居址より出土した土器片が弥生後期のものとみられ、I号地出土打石器（写14の2）は土すれの多い弥生式石器とみられる。打石器類は8個と少ないが、i23出土の大形の楕形打石器あり（写14の8）弥生式石器の典型的なものである。

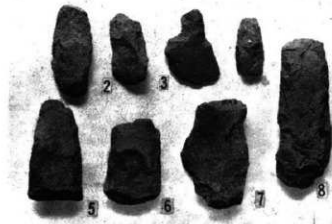


さつみ遺跡遺物2 (写真13)

写14の3はO1出土の弥生式の有肩屈状石器の2分の1を欠くものである。

IV号住居址出土の土器片は量的に少ないが、屈分期のものとみられる。灰輪陶片も僅かにみられておりV号住居址より須恵器片が検出されている。

土器、石器類は極めて少なく、器形をみられるものは縄文後期の土器片のみである。陶器片は多く、器形のおかれるものが多い。



さつみ遺跡遺物3 出土石器 (写真14)

写真15の1はa 9出土の磨石とみられるもの、2はm17 3はc 5出土で不明の石器である。
古銭は7枚検出されており次のようである。(写真17)

編年年代	出土地点
感平元宝 998年	II f-2 28号火葬墓の周辺
天聖元宝 1023年	"
皇宋元宝 1039年	C23 9号火葬墓
紹聖元宝 1094年	II a 4 火葬墓とみられるが未調査
大観通宝 1107年	n 5 5号火葬墓
不明(磨滅)	o 7 3号火葬墓
"	H C 11 14号土坑上部

出土土器片、石器をまとめると下記のようなものである。

- 縄文式後期土器片100 晩期土器片1
- 弥生式(後期)10
- 土師器片20・須恵器片2
- 灰釉陶片10・青磁陶片4
- 中世陶器片100 内耳土器片20
- 山茶わん片4
- 近世陶器片20

石器・打石岸10、磨石3、不明石器2

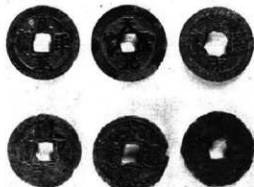
5. さつみ道跡の考察

さつみ道跡の発掘調査は部分調査により、住居址は1部分を調査したのみにすぎないので7住居址中、6号址のみがプランを知ることができたものである。このため再調査により、その全貌を把握すべきで、このため少なくとも30グリットの調査を必要とする。

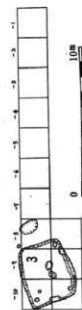
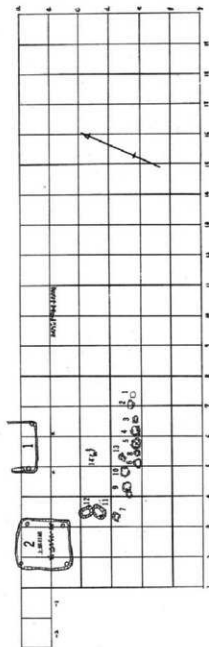
土址、火葬墓についても同様なことがいえるもので、特に土址の性格、火葬墓と土葬穴の時間的な究明、分布の状況を知るために67グリットの発掘調査を要するもので、第I群25グリット、第II群では7、第III群では21、第IV群IV群で14のグリットは調査することが課題である。



さつみ・遺物 4 (写真15)



さつみ・遺物 5 (写真16)



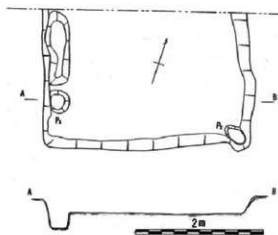
IV 古屋垣外遺跡遺構及び遺物

1. 住居址

(1) 1号住居址(図5) a 5グリットを中心に発見されたもので、北半分は道路予定線をはず

れ調査不能となった。南東隅壁にはナシの植穴のために破壊され、遺物はb 6グリットに凝って出土をみた。住居址のプランは東西3.5mの隅丸方形のもので砂層に20cm×30cm振りこむ堅穴住居址である。柱穴は南北隅の壁について1個、南壁より40cm離れた西壁に1個があり、4個の主柱穴をもつ住居址とみられ、壁に密着した所に柱穴をもつことは狭い住居址を最大限に利用するための構築方法として注目される。西柱穴に隣りあって壁に密着する120cm×40cmの細長い貯蔵穴があり、深さ10cm~15cmのものである。

遺物は座光寺原式の銚形土師片と中島式壺形土師の頸部片に欠山式のカメ形片があり、打製石刃丁1を輸出しているが遺物は少ない。座光寺原式を伴出しているが、1号址の時期は弥生終末のものと考えられるべきものである。



古屋垣外 1号住居址 (図5)



古屋垣外 1号住居址 (写真17)

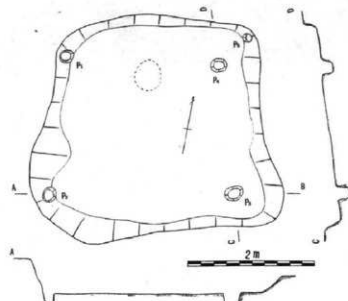
(2) 2号住居址(図6) a 3, b 3に中心をおくもので地表より黒土層の70~80cm下に泥濘堆積の砂層があり、この砂層にシルト状の土で壁がためられたのを輸出し、これに沿って掘りすめて発見した住居址である。砂層の下に厚さ5cmほどの黒土層があり、この下に床面がある。プランは、東西3.8m、南北3.4mの隅丸方形で壁高20cmの堅穴住居址である。主柱穴4個で南東隅の壁について斜めに南西に向く支柱穴1がある。伊址は住居址の北側3分の1の中央部に深さ5cmの浅い掘りこみをもつ50cm×40cmの楕円形のものであった。遺物は僅かな中島式と欠山式の土師片を輸出したのみであるが、弥生終末の住居址と決定づけたものである。

(3) 3号住居址(図7)

トレンチの最西端にあり黒土層を15cm掘りこんだ堅穴住居址でプランは東西4.4m、南北3.7m隅丸方形。主柱穴は4個、北東の柱穴は壁上にあり、南西の柱穴は支柱式をもっている。南壁側には長さ2m、巾20~30cm、深さ7cmの居溝をもつ。伊址は中央より南によって60cm×37cmの楕円形の深さ15cmの凹をもつ、伊内は多くの炭灰があり、この中から欠山式のカメの口縁部片が出土している。伊址の東側に75cm×50cmの楕円形の深さ10cmの凹があり、伊址であったものが使用されずにあつたものか、または容器を置いたものとも考えられるものであった。

貯蔵穴は南東隅に深さ16cm、65cm×48cmの楕円形のもの2個ある。遺物は少なく中島式の壺形、カメ形の土師片に欠山式土師片を伴出している。弥生終末の住居址である。土師、住居址の北110cmに125cm×90cmの深さ20cmの土壁がある。高森町月夜半道跡における例にこそこれと同じ形のもの4住居址にみられている。しかしこの性格については把握するまで確信にはたっていない。

3号住居址とも規模は小さく、遺物も極度の少ない、弥生終末期住居址発掘調査例では、飯田市歌科安宅遺跡、高森町月夜半道跡があるが、住居址の規模は小さく、遺物も安宅道跡C1号址を除き少ないことが特徴である。今次調査によって特に山麓、または山麓に近い道跡においては顕著であることがはっきりした。このことは弥生終末期における飯伊地方の問題点として今後究明すべき課題といえよう。

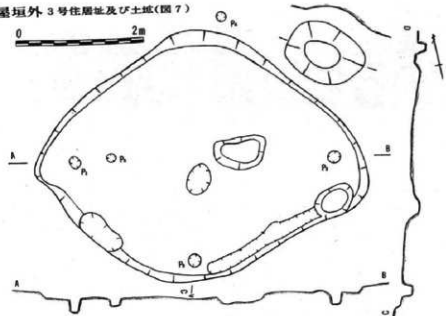


古屋垣外 2号住居址 (図6)



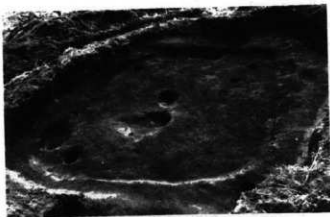
古屋垣外 2号住居址 (写真18)

古屋垣外 3号住居址及び土城(図7)



2. 墳墓群遺構(図8)

墳墓群遺構はc 2、c 5、d 3-d 7の各グリットより発見されたものである。それらはきわめて狭い範囲内に集中して存在していた。またいずれの墳墓も黒色土層最下部より土塚状をなすものと、華大の自然角礫を雑然と配置する配石状態を示すもの二種がある。1号より8号及び10号墳墓は、発見当初より円形を有する配石状態を示すものであったが、特に4号、5号、8号付近においてはその配石状態はきわめて雑然としたものであった。これらの墳墓群は、ほぼ南西より北東に直線的に存在しており、その大きさも長径50cm、短径40-30cmを算するものであり、深さもほぼ20cm前後と同様な規模を示すものである。

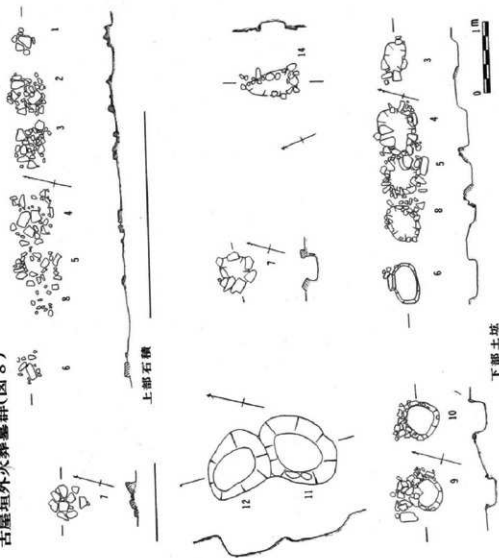


古屋垣外 3号住居址(写真19)



火葬墓群 上部石積(写真20)

古屋垣外火葬墓群(図8)



1号墓は、褐色砂層上面に自然石8個をもって円形に配されていたものであり、きわめて小形なものである。また配石下部には掘り込みもなく、自然石を配置したのみであった。2号墳墓も1号墳墓同様褐色砂層上面に構築されたものである。

3号墳墓より4～8号、10号の各墳墓は、褐色砂層をわずかに掘り込みの周辺部に自然石を配置するもの

の二種が存在する。かかる墳墓はいずれも四部底面より10cmほどまでは暗黒色の土が存在し、それより上部は墳墓掘り込み周辺までを拳大の石で上部をざしりつめその上部にやや大きな石数個をもって蓋状に置いている。さらにその上部を拳大の石でマウンド状に若干積み上げて墳墓を構築したものと考えられる。その中において9号、10号墳墓は発見当初より、特に北面に多くの自然石を配置し円形の掘り込みが認められるものであったが、北面のみ底面近くまで壁面に拳大の石を仮込むものであった。またこれらの墳墓群に対し11号12号墳墓は黒色土層最下部より白色砂層まで掘込み土坑状をなし、自然石などをもって構築したものではない。ただ11号墳墓のみ底面近くの壁面に2個の自然石が仮込まれており、その周辺より中世陶器が出土している。この2つの墳墓は相接しているものであり、11号は12号墳墓によって切られたものである。

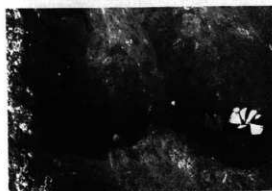
これらの墳墓群の中で、自然石を用い構築したものは、その形態、構築方法などより飯田市山本竹佐において調査された大塚火葬墓群と同種のものである。また出土遺物の中に中世陶器類や砥石などから認められる事実から、中世における火葬墳墓の一形式と考えられるものである。またこの種の遺構は、中野市安海寺遺跡においても調査されているものであり、中世における墳墓構築状態を明瞭に示すものである。またこれら墳墓群の有する性格からも中世仏教思想の一種相を知る手がかりにもなる。



古墳垣外火葬墓群 (写真21)



火葬墓9号・10号 (写真22)



火葬墓11号・12号

本調査における墳墓群は、きわめてかぎられた範囲内に集中している点、この墳墓は中世における一家族的集団の墳墓として考えられるのである。なお11号・12号墳墓はたがいに切合い関係にあるが、時期的には同じであり11号と12号墳墓の間には、わずかな時間的差が存在するものと思われる。

13号は最後に発見されたもので、ともに土坑壁を石で囲むものであり、14号は深い土坑を掘り石を並べたものである。

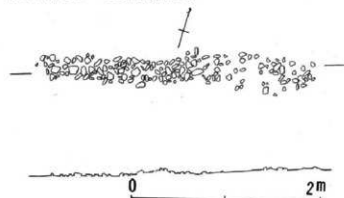
出土遺物は中世陶器類が墳墓群周辺部より比較的多く認められている。5号土坑底より天目茶わん片、7号土坑底には古瀬戸焼茶わん片、11号の中からはカメの大破片が4片重なって出土している。その他の副葬品は発見されなかった。なお墳墓群形態をみると、

①円形に石を積み重ね土坑をもたないもの、②坑壁を石でかむもの、③石を並べるもの、④土坑のみのもの4形態に分類される。なおグリットb9及びb10にかけて直線的に自然角礫を配した長さ3m巾30cmほどの配石遺構が発見されたが、これは黒土中に存在するものであり、その配石状態もきわめて雑然としたものである。また2号住居址上部の黒土中にもこれと近似したものが存在し、これを延長すると直線的につづく可能性がある。またその周辺部及び配石内部からは、近世陶



火葬墓14号 (写真24)

古墳垣外b9・b10石組 (図9)



器類にまじり中世陶器類の胎生式土器（高杯脚部）などが伴出している関係上これは後世のものと考えられる。

以上墳墓群について説明してきたが、その形態などより中世火葬墓群として考えられるものであり、大塚火葬墓群、安海寺火葬墓群などの間からも中世における火葬墓の一列として注目されるものである。

3. 遺物

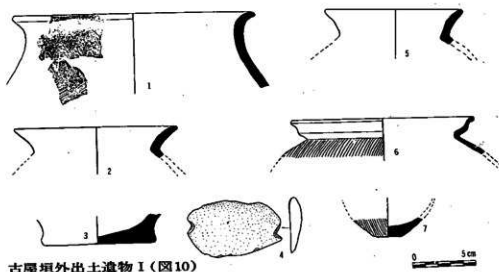
(1) 弥生式住居址出土遺物 (図10・11)

1号住居址(1~4, 8~10) 1は甕形土器で、口縁部はゆるいカーブで外反し、胴部は張るものとみられる。頸部に流状文を、胴部にかけて平行斜走線文が施されており庶光寺原式(II)の特徴をもつものである。2は甕形土器の口縁部で扇状花形の開いた口縁をもち、胴部は球状になる安宅遺跡C区・1号址出土の欠山式の大形煮込と同形になると思われるものである。3は底部で底からの立上りが一旦は内側へもどり外反して胴部へ続く中島式(II)にみられるものである。8は底部に換る部分、9は胴部片でともに櫛状器具による細い条痕が施された欠山式甕形土器にみられるものである。10は4分の1の同心円弧文で、中島式甕形土器にみられるものである。無文の口縁部の小破片が一片ある。この口唇部には浅い刻み文がかすかに残っているものである。器形様式は不明である。その他、へうろ筒調整をもつ中島式にみられる土器片数点がみられる。

石器は4の打製石庵丁1個のみである。背面に自然面をもつ粗雑な作りで、重量45g、刃部角30°、硬砂岩製のものである。

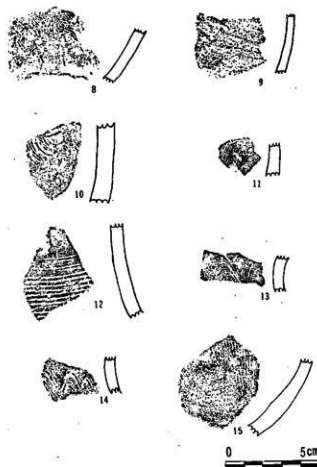
2号住居址(5・11) 5は2と同様の欠山式甕形土器にみられる口縁部である。11は中島式の甕にみられる平行短線文を施した胴部片である。

3号住居址(6・7 12~15) 6は炉址の中から検出されたもので、S字口縁をもち器壁の極めて薄い良質な胎土で焼成は堅い。櫛状工具による細い条痕が胴部に斜に施されて



古厩塚外出土遺物 I (図10)

いる。胴部はおそらく球状になるものとみられ付着になると思われる。7は埴形の底部で細い条痕が斜めに引かれている。12は甕形土器の頸部で横走文が施されたもので、庶光寺原式にみられる横走文の下に成状文が施されるものとみられる。13・14は中島式の甕形にみられる流状文が施されたものである。15は6の胴部とみられる。この他、無文のへうろ筒調整を獲す甕形の焼成の良い小破片数点が検出されている。



3号住居址ともに出土遺物は極めて少なく、主体となる土器は中島式と欠山式であるが、これに伴って庶光寺原式の土器が出土しており、この点は今迄の飯伊地方の弥生終末期の住居址出土遺物例とは異なるものである。また石器は石庵丁1個のみの出土で、これも極めて特異な例といえる。

(2) 中世陶器片

火葬墓群より出土したもので、5号火葬墓より良質な天目茶碗

古厩塚外出土遺物 II (図11)

が、7号火葬墓では美しい灰輪窯の古瀬戸茶碗の胴部片が、11号火葬墓より同一器形の鉢の大形破片7片が出土している。この鉢も美しい黄土色の灰輪である。大葬墓の石積みの中よりは天目茶碗片、蓋の破片等約20点が検出されているがいずれも良質なものである。

(3) その他

不明の列石中より近世陶片が多く出土しており、これにまじって中世ともみられる雑器類も検出されている。12号火葬墓より砥石1個が出土し、列石中より砥石3個が検出されている。

- | | | | | |
|-----|------|-----------|-------------|-------|
| 注1. | 今村勝典 | 原田市庶光寺原遺跡 | 長野県考古学会誌第4号 | 1967年 |
| 2. | 佐藤路信 | 安宅遺跡C区 | 安宅・大島 | 1969年 |
| 3. | 宮沢恒之 | 原田市中島遺跡 | 長野県考古学会誌第4号 | 1967年 |

4. 考 察

今次調査区域は遺跡の南端部のごく限られた1部の発掘調査であったが全面発掘により期の住居址3の調査と中世火葬墓群の全貌を把握できた意義は大きい。

弥生住居址群が調査区の北面の果樹園に拡がること予想された。

弥生終末期における住居址が他の遺跡の発掘調査例と対比して飯伊地方におけるこの時をつむ手がかりを得た。

中世火葬墓群についての構築方式について円形に石組をもつ例が明らかになった。ま副葬がなく、良質な陶器片を埋葬に用いたことに対し、山本大塚火葬墓群との対比においてまたは埋葬者の身分差を考えてみる手がかりとなった。

お わ り に

長野県内の中央高速自動車道のコースが決定され一部ではいよいよ工事に入ることになし、このコースには埋蔵文化財が多く存在することは分布調査で明らかになってい日本道路公団と長野県教育委員会の間にしばしば協議もたれた。その結果、昭和45年版飯田さつみ遺跡と古屋垣外遺跡については記録保存することになり、長野県中央道遺跡調査設立され、調査金が日本道路公団名古屋支社の依頼をうけて発掘調査を行なうことになり遺跡調査会を主として地方の考古学研究者を調査員に委嘱し3月4日より3月31日ま急に発掘調査を行なった。

さつみ遺跡については部分発掘をなし、遺構の存在が明らかになった場合には再契約しするきまりであったので、今回の発掘では遺跡の全貌は明らかにされ得なかったが、住居址中世の墳墓群4を発見した。

古屋垣外遺跡では全面発掘を行ない弥生後期の住居址3と中世火葬墓14基を発見し、下飯田地方の中世墳墓の形態を明らかにし、それが北側のそれと共通点があることを明らかにしたことは大きい収穫であった。

ただし、3月とはいえ異状天候の厳寒と連日の吹風と強風の中で行なわれたが、発掘調査になって、遺跡調査会の協力と発掘調査員の努力と調査に加わった飯田高校考古クラブなどの奮闘により、期間内に発掘調査の完了し得たことほありがたいことであった。

現場調査から整理、報告書の作成にと、期日に限定があり、無理な仕事を強行したが、成果と今後の見とおしをもったことはよるこびにたえない。

この報告書の執筆は大沢和夫、佐藤勉信、遠藤麻理子があつた。

さつみ・古屋垣外 中央道埋蔵・文化財発掘調査報告書

印刷 昭和45年3月30日

発行 昭和45年3月31日

発行者 日本道路公団名古屋支社
編纂者 大沢和夫 佐藤勉信
印刷所 飯田市通り町1 秀文社
